

武蔵野音楽大学

学芸員課程

年間活動報告書

平成 30 年度[2018]



アイリッシュハープ



アイリッシュハープは、20〜25世紀の楽器で、アイルランドの伝統的な楽器である。中央のフレームに弦が張られており、弦は木製のフレームに固定されている。この楽器は、アイルランドの音楽文化の重要な要素であり、多くの音楽家によって演奏されている。

2018 年 10 月 27 日 (土)、28 日 (日)

11:00~16:30

S314

音楽環境創造学科 4 年

目次

学芸員課程に関するカリキュラム	2
本学学芸員課程の基本方針等	3
平成 30 年度に実施した学外施設見学	6
博物館館務実習	9
博物館実習展示企画	11

凡例：

- ・本報告書は、平成 30 年度（2018）における、学芸員課程を紹介するものである。
- ・本報告書で記載されている教員の役職名、学生の年次などは、すべて平成 30 年度（2018）時点のものである。

学芸員課程に関するカリキュラム

第1・2年次（新カリキュラム）

生涯学習概論	博物館経営論
博物館学概論	博物館展示論
博物館情報・メディア論	

第3・4年次（旧カリキュラム）

3年次	4年次
博物館学各論Ⅱ	博物館実習
博物館教育論	

武蔵野音楽大学学芸員課程 担当講師 中川俊宏（本学アートマネジメントコース長）

- ・ 1年次：
 - 博物館学概論（半期：講師 熊澤弘）／生涯学習概論（半期：講師 守重信郎）
- ・ 2年次
 - 博物館展示論（半期：講師 久保仁志）／博物館情報・メディア論（半期：講師 久保仁志）
 - 博物館経営論（集中：講師 久保仁志）
- ・ 3年次
 - 博物館資料論（半期：講師 守重信郎・脇谷真弓）
 - 博物館資料保存論（半期：講師 守重信郎・脇谷真弓）
 - 博物館教育論（集中：講師 脇谷真弓（楽器ミュージアム））
- ・ 4年次
 - 博物館実習（通期／実習：講師 久保仁志）

本学学芸員課程の基本方針等

学芸員課程とはどのような科目でしょうか。それを武蔵野音楽大学という音楽教育を専門とする大学において学ぶ意義はなんのでしょうか。ここでは、本学の学芸員課程の特色を紹介いたします。

学芸員課程とは

博物館とはどのような場所なのでしょうか。文化庁のウェブサイトの記述を引用すれば、博物館とは「資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及といった活動を一体的に行う施設であり、実物資料を通じて人々の学習活動を支援する施設」であり、「歴史や科学博物館をはじめ、美術館、動物園、水族館などを含む多種多様な施設」として、日本の社会教育・文化芸術にとって重要な位置を占めています（http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/gaiyo/ *2019年4月22日閲覧）。そして、学芸員とは、「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業を行う「博物館法」に定められた、博物館におかれる専門的職員」とされています

（http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/ *2019年4月22日閲覧）。

学芸員課程とは、このような専門職員にふさわしい技能・知見を習得するために開設されたものであり、日本国内の多くの大学で、学芸員認定課程のための科目が開設されています。

この教育課程で学ぶことは、単に「博物館で学ぶためのノウハウを学ぶ」ということではありません。そもそも、この課程を履修したから「学芸員」あるいは「キュレーター」になれるのかと言われれば、それは極めてハードルが高く、高度な専門性と実践経験が必要なこの職業に実際についている人はほんのわずかと言わざるを得ません。

この科目で私たちが学ぶことのできるのは、「博物館という社会教育／文化施設での活動を通じて、どのように文化・芸術に接することができるのか」という、芸術を学ぶ上で重要な視点そのものと言える内容です。そしてそれこそが、本学の学芸員課程が核に据える内容と言えます。本学は「音楽芸術の研鑽」を教育方針の一つに据えていますが、本学の学芸員課程は、その音楽芸術への理解をより一層高めるために、「歴史」「ほかのジャンルの芸術」「文化遺産・文化財」を包括する博物館について学び、芸術文化全体に対する意識を高めるものとなっています。

モノに即した学び

学芸員課程のための学問は、「博物館学」(Museology / Museum Studies)と呼ばれています。これは、「ミュージアム」をめぐる様々な領域を包括する学問で、それは文化史・歴史学的、博物学的・考古学的な学問のみならず、政治・経済学的、情報統計学的でもあり、そして教育学的な要素も含まれた、複合的な学問といえます。

このような博物館学を、大学における学芸員課程のなかで学ぶ際には、二つの点が重要になります。一つは、講義を中心とする座学において、文化芸術の複合的な視点から学ぶことであり、もう一つが、博物館や図書館の資料、つまり「実物」に即した学習が重要視される、という点です。

2番目の特徴である実物に即した学習を行うためには、実物に多く接し、学ぶことが必須となります。そのために学芸員課程では、学外で博物館等の施設見学を行うことがしばしば行われます。本学の学芸員課程でも、学芸員課程履修者全体で博物館見学を行う機会を作るほか、各科目において、専門的な内容に即した施設見学を行っております。

それとともに、実物に即した学習で最も重要な点は、大学自体に学ぶための学術資産があるか、という

点になります。実際、学芸員課程を開設する大学にはそれぞれ歴史があり、それらの学術資産として、様々な資料が蓄積されています。そしてそれらの学術資産の使用可能性によって、各々の大学の学芸員課程の「キャラクター」が決まってきます。

武蔵野音楽大学が所蔵する「実物」資料とは、いうまでもなく「楽器ミュージアム」や「図書館」所蔵する種々の資料のことになります。特に、楽器ミュージアムには、日本国内で有数の所蔵品件数を誇る音楽資料の博物館であり、それらを活用した授業・実習をすることができることは、音楽芸術に対する理解をより多面的なものとすることができる、という点で、本学の学芸員課程の大きな魅力となっているのです。

「モノ」に即した学問である博物館学の醍醐味が最も発揮されるのは、最終年度に実施される「博物館実習」です。ここでは通常の講義・実習とともに、「館務実習」として、本学の楽器ミュージアムが主たる実習先となっています。学外の施設で実習を行う学生もいるとはいえ、音楽教育に直結する資料をこれだけ多く所蔵する施設がある強みは見逃せません。また、「博物館実習」のみならず、通常の授業のなかでも（例：博物館学概論／博物館資料論／博物館資料保存論／博物館教育論 等）、楽器ミュージアムに協力頂いている点は、本学の学芸員課程のメリットと言えるでしょう。

音楽系大学における学芸員課程の意義

ところで、本学のような音楽系単科大学のなかで、博物館学講座を開設しているところはさほど多くはありません。そのなかで、「ユニヴァーシティ・ミュージアム」、すなわち大学内の学術資産をまとめた博物館を有しているところは、東京圏内では国立音楽大学と武蔵野音楽大学が挙げられます。本学のような音楽を専門とする単科大学にとって、博物館学を履修可能であるという事実は、以下の点で利点があると言えます。すなわち：

1. 楽器資料を通じて、音楽と、音楽に関連する芸術文化全体を学習することができる。
2. 楽器資料を活用した展示と、教育普及プログラムを展開することができる。

前者は、楽器を単に、音楽史上に残る珍しい資料として取り扱うだけでなく、その楽器資料を出発点として、音楽、ならびに、音楽に関連する文化（芸術史全般、西洋・日本東洋・民俗芸能史、など）を考察する原点とすることを意味します。また、後者については、楽器資料を出発点として、展示されているもの／教育普及プログラムとして提供するものが、「来場者」「鑑賞者」「参加者」にいかなる効果を与えるのか、という点から理解することができるのです。

本学の学芸員課程の歴史

以下において、本学の学芸員課程の概要について、簡単に紹介しておきたいと思います。本学で学芸員課程が開設されたのはいまから10年以上前にあたる2007年度のことです。当時新たな学科としてスタートした音楽環境運営学科（＊現在のアートマネジメントコースの前身）で取得できる資格として、音楽環境運営学科生のみが履修できる環境にありました。音楽環境運営学科の当時の学生の大半が学芸員課程を履修することもあるとあって、この課程は、本学の博物館学を指導するとともに、その科目と密接に関連するアートマネジメント教育の一端を担うものと位置づけられていました。

その後、2017年度に江古田の新キャンパスが竣工し、音楽学部が改組され演奏学科、音楽総合学科が開設されたのと時期を同じくして、学芸員課程は音楽環境運営学科のみならず、すべての学部新入生が履修できるようになりました。この課程の変更により、本学の学芸員課程は、アートマネジメント教育の一端を担う、という位置づけから、音楽芸術をより多様に学ぶための科目としてその内容を拡張

させています。そして実際、本学の学芸員課程は、専門職員としての学芸員の業務的な実践を学ぶことができるとともに、文化芸術全体をより多面的に、深く理解するきっかけとなる点が重要なポイントと言えます。

本学学芸員の基本方針

本学の博物館学講座全体の基本方針は以下の通りとなります。

1. 博物館学／文化遺産に対する基礎知識を学ぶ（博物館学概論）
2. 博物館という社会教育施設の運営と、その政治性を学ぶ（博物館経営論）
3. 博物館で取り扱う「資料」の概念を学ぶ（博物館資料論／博物館情報メディア論）
4. 社会教育施設としての博物館の、「教育的側面」を学び考察する（生涯学習概論／博物館教育論）
5. 博物館資料としての「楽器」を学ぶ（博物館資料論／博物館資料保存論）
6. 「楽器」「音楽資料」を活用した展示企画を実施する（博物館実習）

上記の内容を達成するために、各科目では、以下のような個別方針が共有されることが望ましいといえます。

1. 座学、実物に触れる学習、博物館・文化施設などの現場での学習を、バランスよく実施する。
2. 学内施設、特に、楽器博物館、図書館の所蔵資料を十全に活用できるプログラムをつくる。
3. 学外施設での学習の機会を、可能な限り確保する。

上記のような基本方針、個別方針を達成するために、それぞれの科目の講師、講義と学外見学のプログラムを構成するとともに、講師同士が連携しながら合同の見学プログラムを実施しております。本学の学芸員課程は、学内の豊かな学術資産を活用しつつ、音楽を中心とする文化芸術をより複合的に学ぶためのプログラムとなっております。

学芸員課程の履修モデル

学芸員課程においては、文化庁が定める以下の科目・実習を行うことが求められています。2019 年度入学者が履修する場合には、以下のよう履修することが推奨されています。なお、主たる科目とともに、教養科目として「ヨーロッパの美術史 I」「文化史 I（半期）」を3年次終了時までには履修することが必須となっています。

（熊澤）

平成 30 年度に実施した学外施設見学

博物館学講座では、講義室で行われる講義、実習とともに、学外にある実際の美術館・博物館・資料館での見学も重視される。講義の中で取り扱われる様々な事象（博物館／博物館学史、国内外の文化施設と制度設計、博物館資料の収集・保管・調査研究・展示・教育活動）が、現場においてどのような形で具現化されているのかを学ぶことが、この見学では重視される。「芸術文化施設見学実習」と同様に、事前調査と現場見学、そして事後研究を連動的に行いながら、文化施設、そしてそのコレクションに対する接し方を学ぶことを、この見学は意図している。

本学の学芸員課程では、博物館学にとって基本である「実物を見る」「実物に触れる」機会を、可能な限り増やしたいと考えているが、楽器博物館／図書館という、重要な学内施設を活用した学びとともに、外に出なければなら得られない「多様な経験」を学ぶ機会を作っている。（熊澤）

1) 全学年合同の見学施設

日時：2018 年 5 月 19 日（土） 引率者：久保仁志／熊澤弘

見学施設：森美術館 | 「建築の日本展」、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 | 「ターナー：風景の詩」、東京国立博物館 | 法隆寺宝物館、国立西洋美術館 | 常設展

学芸員課程履修者（1-4 年）による東京都内の博物館見学を実施した。今年度は森美術館、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館、東京国立博物館、国立西洋美術館を見学した。

この見学は次の 2 点を意識したものである。①博物館の社会教育施設に触れる機会の少なかった学生に、施設の活用について学ぶための導入学習であるという点。②博物館施設見学の準備を行うことを通じた情報整理の学習であるという点である。

学芸員課程のなかで博物館学を学ぶ際に、実際の施設に触れることが重要である。しかし、ただ訪問するだけでは、余暇の過ごし方の一つになってしまう。この見学において重要なことは、このような施設がどのような学術的・社会的・政治的・経済的背景を持ち、どのような意図において企画運営されているのかを意識しながら、注意深く見て学ぶことである。事前に見学の葉を作成し、それらを参照しながら実見すること。事後に自身の学びを、客観的な視点から見つめ直すことを通じ、総合的な博物館学的視点を獲得することが求められている。とはいえ、新入学生の大半は、博物館・美術館に日常的に触れていないという実情があるため、まずは博物館という施設に慣れ親しむきっかけを作り、それを土台に「博物館」の実際と理念を学ぶ必要がある。

なお、平成 30 年度のこの見学は、博物館教育論の履修者（学部 3 年生）が企画運営を行い、資料作成、会場内での解説を担当した。学生が主体となり、学生同士が教えるとともに学び合うための場でもあった。（久保）

2) 博物館情報・メディア論／博物館展示論 (2 年次)

2018 年 10 月 13 日 (土) : 国立新美術館 | 「オルセー美術館特別企画ピエール・ボナール」展見学、担当学芸員解説の聴講、六本木周辺ギャラリーの調査

2018 年 12 月 1 日 (土) : 森美術館 | 「建築の日本展」、東京国立博物館 | 「マルセル・デュシャンと日本美術」、東京都美術館 | アーカイブズ見学、慶應義塾大学アート・センター | アーカイヴ見学

博物館情報・メディア論での施設見学は、同講義で主眼を置く「アーカイヴ」の概念に対する理解を深めることを目的とし、日本有数の戦後の美術関連資料を所蔵する「慶應義塾大学アート・センター」において、所蔵資料、収蔵システム、特に戦後以降の美術における資料の重要性などについての講義を行った。また、東京都美術館アーカイブスにおいては、組織資料の構築の重要性とその方法論について講義を行った。森美術館においては、博物館・美術館などの施設に実物を保存・展示不可能な物(例えば建築等)をいかに資料を通じて保存・展示していくかということについて講義を行った。東京国立博物館においては、作品と資料の不可分性を 20 世紀の美術において提示したマルセル・デュシャンを通して、資料と作品の関係性についての講義を行った。

博物館展示論の施設見学は、国立新美術館での展示を通じ、企画展がどのように企画運営されるのか、また展示に関わる諸問題についての講義を行った。また、美術館と美術ギャラリーとの関係性、および同時代の美術作品が生産される背景について学ぶために六本木周辺にギャラリーを巡った。また、これらの見学は事前に、施設についての予備学習をし、事後、授業内での口頭発表を各学生が行うことによって、より総合的な視点において、博物館について学ぶための場となった。(久保)

3) 博物館資料論／博物館資料保存論における工房見学

1. 2018年10月6日(土) 14時～

弦楽器工房見学

江古田ストリングス (〒176-0006 東京都練馬区栄町
15-5-1F)



2. 2018年10月13日(土) 13時45～

ピアノ修理工房見学

JMG 株式会社 (〒335-0005 埼玉県蕨市錦町 1-13-20-
A1)



3. 2018年10月20日(土) 14時～

管楽器修理工房見学

ヤマハミュージックリテイリング管弦楽器リペアセン
ター (〒104-0061 東京都中央区銀座 7-9-14)



博物館館務実習

4 年次に実施される博物館実習では、学内外の博物館等にて館務実習を行うことを求めている。多くの履修生は学内施設である武蔵野音楽大学楽器ミュージアムでの実習を選択するが、学外での実習も可能であり、例年複数の履修者が学部の施設での実習を選択している。

2018 年度の履修生は、本学の楽器ミュージアムでの実習を選択したので、その概要をいかに記す。

武蔵野音楽大学楽器ミュージアム

武蔵野音楽大学 江古田キャンパス／入間キャンパス内

概要：

武蔵野音楽大学では、教職員・学生の教育・研究のために、昭和 28 年から世界各地の楽器資料を収集し、楽器陳列室で展示・保管してきた。昭和 42 年、邦楽器研究家である故水野佐平氏から貴重な邦楽器コレクションが寄贈されたのを機会に、この陳列室を武蔵野音楽大学楽器博物館に改組した。さらに、昭和 53 年には、入間キャンパスにも楽器博物館が、平成 5 年には、パルナソス多摩に楽器展示室が開設されて現在に至っている。

所蔵している資料は、楽器、楽器附属品、装置・器具類、その他の音楽関係資料の 4 部門に分類されている。楽器部門には、数々の名器や珍しい歴史資料と世界各地の民族楽器が、楽器附属品部門には、ヴァイオリンやチェロの名弓コレクションが、装置・器具類にはエジソンの蓄音機や歴史的オルゴールが、音楽関係資料には、楽器演奏人形や図像資料が含まれ、その総数は 5,700 点を超えている。

実習：

楽器博物館の楽器コレクションの博物館資料としての意義を知り、展示業務等に関わった。実習の最後には、各実習生が、コレクションから選定した資料についての解説パネルを作成（守重）

2018年度 楽器博物館学芸員実習							
月日	曜日	キャンパス	実習内容＜AM＞		実習内容＜PM＞		備 考
			(担当者)				
9. 3	月	江古田	(守重)	概略説明	(松野尾) 文献調査		
				パネル用テーマ決定	(脇谷) 多摩について		
9. 4	火	入間	(脇谷)	移動関係作業①【場所の整備ほか】・学祭用ケース積み込み			
			(須藤)				
9. 5	水	江古田	(守重)	撮影			
9. 6	木	入間	(脇谷) (須藤) (松野尾)	移動関係作業②【場所の整備ほか】			
9. 7	金	入間	(須藤)	移動関係作業③【場所の整備ほか】			
			(松野尾)				
9. 1	月	入間	(脇谷)	移動関係作業④【場所の整備ほか】			
			(須藤)				
9. 11	火	多摩	(脇谷)	梱包・ケース清掃			
			(松野尾)				
9. 12	水	江古田	(守重)	調査（学祭企画）			
9. 13	木	江古田	(守重)	パネル用文書作成 ①	(脇谷)	パネル作成①	
9. 14	金	江古田	(脇谷)	パネル作成 ②	(全員)	反省会	

実習報告：

2019年1月26日（土）14：00～博物館実習報告会をS414室において開催した。



博物館実習展示企画

企画名：「ケルトをあけると？」

日時：2018年10月27、28日

会場：S314 教室

実施者：博物館実習履修者

入場者：2018年10月27日 | 216人、28日 | 253人

「紀元前1200年頃からヨーロッパ全体に分布していた多くのケルト人は、紀元前300年頃、ローマ帝国の侵略によって西へ追いやられた。中には大西洋を渡り、アメリカ大陸で生活する者もいた。つまり、ケルト圏とはこのようなケルト人が生活していた地域を示す言葉であり、決まった国や地域の総称ではない。また、現代の私たちがよく耳にする「ケルト音楽」とは、これらの地域で誕生した音楽を指す総称である。私たちが何となく耳にしたことがある「ケルト」には、決まった定義が存在しない。

一般的にはケルト系の言語、民族、文化を持つ地域という共通項でくくることができる6つのエリア(アイルランド、スコットランド、マン島、ウェールズ、コーンウォール、ブルターニュ)をまとめて、ケルティック・ネーションズ(ケルト国)と呼んでいる。

本展ではこれら6つのエリアで伝統音楽を演奏する際に使用する楽器4種類〔クルース、コンサーティーナ、バッグパイプス、アイリッシュハーブ〕、5つの楽器を展示している。



アイリッシュハーブ

アイリッシュハーブは、約4000年の歴史を持つ、最も美しいと称される楽器の一つである。中世より神聖な儀式に用いられていたもので、現在は主にウェールズ、スコットランド、アイルランドの伝統音楽で演奏される。アイリッシュハーブは、木製のフレームに、羊の腸で張られた弦が取り付けられている。演奏者は、弦を指で弾き、足で踏むことで音を出す。アイリッシュハーブは、ケルト音楽の象徴的な楽器であり、多くの音楽家によって演奏されている。

ケルトをあけると?

2018年10月27日(土)、28日(日)

11:00~16:30

S314

音楽療法実習室 4年

ケルトとは

紀元前1000年頃からヨーロッパ各地に分布していた多くのケルト人は、紀元前300年頃、ローマ帝国の侵略によって西へ追いやられた。中には大西洋を渡り、アメリカ大陸で生活する者もいた。つまり、ケルト圏とはこのようなケルト人が生活していた地域を示す言葉であり、決まった国や地域の総称ではない。また、現代の私たちがよく耳にする「ケルト音楽」とは、これらの地域で誕生した音楽を指す総称である。私たちが何となく耳にしたことがある「ケルト」には、決まった定義が存在しない。

コンサーティーナ

コンサーティーナは、19世紀後半にスコットランドで発明された楽器である。これは、2つの面が振動する原理で音を出す。演奏者は、両手で楽器を握り、息を吹きかけ、指で鍵盤を押すことで音を出す。コンサーティーナは、ケルト音楽の象徴的な楽器であり、多くの音楽家によって演奏されている。

クルース

クルースは、ケルト音楽の象徴的な楽器の一つである。これは、木製のフレームに、羊の腸で張られた弦が取り付けられている。演奏者は、弦を指で弾き、足で踏むことで音を出す。クルースは、ケルト音楽の象徴的な楽器であり、多くの音楽家によって演奏されている。

バッグパイプス

バッグパイプスは、ケルト音楽の象徴的な楽器の一つである。これは、木製のフレームに、羊の腸で張られた弦が取り付けられている。演奏者は、弦を指で弾き、足で踏むことで音を出す。バッグパイプスは、ケルト音楽の象徴的な楽器であり、多くの音楽家によって演奏されている。

(「ケルトをあけると？」展パンフレット)

本展示は、学芸員資格取得課程で最終年に履修する「博物館実習」の成果発表である。本学の学芸員課程は、博物館という社会教育施設、博物館資料について多面的に学び、考察することを目指している。「博物館実習」では、本学の楽器博物館、図書館の協力のもと、楽器や楽譜などの音楽資料を活用した展示企画を行っている。資料とは何か、それをどのようにすれば広く社会に役立つようになるのか、伝えるべき情報とは何か、このような博物館学に関わる根本的な問いに対する学生の一つの答えとして展示が企画運営されている。また、「博物館実習」において学ぶ資料の扱い方、情報化についての実践の場となっている。

今年度の企画は、「ケルト」をテーマとした展示であった。広く認知されているとは言えないこのテーマを、ケルト圏で用いられる具体的な楽器を通じて知ってもらいたい機会になった。アイリッシュハーブの試奏コーナー、ケルト圏の音楽を体験できる映像コーナーを設けることで、来場者により身近に感じてもらえる工夫を行った。学生が主体となって、企画案の検討から始まり、ポスターやパンフレットの制作を行い、見事に展示として結実した。

展示後、自らが行った企画運営の工程表を作成し、運営についての反省とともに、この展示企画がどのようなものであったのかを改めて考える機会を設けた。(久保)

武蔵野音楽大学 学芸員課程
年間活動報告書 2018

発 行 : 武蔵野音楽大学
音楽総合学科 アートマネジメントコース
編 集 : 武蔵野音楽大学
音楽総合学科 アートマネジメントコース

刊 行 日 : 平成 31 年 (2019) 3 月 31 日